

町中探しても二軒の判屋に、高橋といふ判がないのです。

久留米まで歩くきました。

久留米餅を一反春子に買って、送つてやりたく思ひました。

けれども日の暮れぬまでにわけを話して、出来版を一つ、敷島と十七銭にまけて貰つて、又二里ばかり歩いて、宿屋にとまりました。

支那人の行商が露骨に女中にやりこめられてゐました。

小爲替を金に替えて、宿錢を拂ふと、私は何處からか汽車に乗つてゐました。

多分初めは長崎行きに乗つたのですが、途中で氣が變つて、安いので東京までの切符に買ひ替へたと思ひます。

若松や門司の景色は厭です。

俺は毛布を腰巻にして、上へ虎の毛のオーバーをまとい、地下足袋を穿いて、頭は毛糸帽をいたゞき、關門聯絡船に乗る事を躊躇した。

コツソリ人目に立たない様に東京入りをして、それから北海道で少し頭を冷そうと云ふのが俺